大学生による高齢者支援の効果

小幡佐久子
（八戸大学人間健康学部）

キーワード：認知症，セラピー，若者との交流

はじめに

近年，認知症高齢者に対してさまざまな療法・セラピーと呼ばれるアプローチが試みられており，集団体操・ゲームなどの各種アクティビティケアや芸術療法もそのひとつである。それらの有効性についてのエビデンスは未だ十分確立されてはいないが，入所者の生活を豊かにするべく，ケアの中に取り入れている施設は多い。今回ゼミ活動の一環として八戸市内の高齢者施設を訪問し，歌やゲームを通して高齢者の支援活動を行い好評を得たので報告する。

方　法

高齢者施設を訪問し利用者と共に楽しむ

1. 第1回訪問（平成20年5月29日）
   施設；小規模多機能型居宅介護施設
   参加人数；利用者8名　学生（3年生）3名
   施設職員　教員
   内容；童謡を楽しむ
2. 第2回訪問（平成20年10月2日）
   施設；小規模多機能型居宅介護施設
   参加人数；利用者8名　学生（3年生）2名
   施設職員　教員
   内容；ゲームを楽しむ（魚釣り・玉入れ）
3. 第3回訪問（平成20年12月14日）
   施設；グループホーム
   参加人数；利用者7名　学生（2年生）5名
   隣接施設の患者5名　利用者家族
   招待客　施設職員　教員
   内容；施設で企画したクリスマス会に参加しゲームと歌を楽しむ

結　果

1. 第1回訪問では童謡10曲を選びキーボードに合わせて歌った。簡単な輪唱や振り付けも準備したが，リズムに合わせて体を動かすことは難しいようであった。アンコールされた曲の中には学生の知らない曲があり対応できない場面もあったが，最後に利用者が握手を求めてきたり，職員からは「若い人が来てくれると雰囲気が明るくなる」とコメントがあった。
2. 第2回訪問ではゲームを楽しんだ。ゲームは全て学生が作製し，作製に当たっては高齢者の視機能や運動機能を考慮した。ゲーム中は運動会さながらに競争心がぶつかりあい，その様を見て学生も驚いた様子であった。
3. 第3回訪問は，前回使用したゲームと歌を披露した。玉入れゲームは何度も行い利用者に楽しんでもらえた。今回は2年生による訪問であり，「利用者に話しかけるのが難しかった」という感想が多かった。利用者は「孫に会えたようで嬉しかった」と話し，また家族からは「家族や職員以外の人と接する機会が出来て良かった」との言葉があった。

考　察

3度の訪問で共通した結果は，「利用者が喜んでくれた」ことである。要因として ① 孫のような年代の学生達で愛しく思える ② 家族以外の面会である ③ 物珍しい ④ 新しい刺激（歌

やゲーム）だった ⑤ 自分のために何かしてくれたという思い ⑥ 若い人と話してリフレッシュできた等が考えられる。また学生にとってはコミュニケーションのとり方や高齢者の知恵を学ぶ機会となった。